

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私には、二歳年上の姉がいた。

男兄弟しかいなかった母親は、姉妹、というものに何かカクベツの思い入れがあったらしい。物心ついた私の、最初の冬場のコートは、姉とおそろいの、落着いた色合いのピンクだった。歩けるようになったばかりの私と、二歳だった姉は、どこへ行っても、まあ、おそろいのね、可愛らしい、と、目を細められた。(らしい)

泣き虫だった私は、外出先で姉の姿が見えなくなると、すぐに、「おねえちゃん」と、目を歪めて大声で泣いた。すると①シヤクのようになり、同じコートを着た姉がどこからともなく駆け戻ってくる。私は姉のコートの裾をつかみ、更に大声を上げて泣く。②そんなシーンも、母親には満足を与えられなかった。

それだけなら良がある話なのだが、母はなんと、その同じコートを大きく別に九着も用意した。それだけの数がよくあったものだと思うが、子ども向けのブランドのその店では、同じデザインのそのコートが——サーモンピンク、白いボタン、Aライン——サイズ違いで九着、存在していたのである。

③母のいい分はこうだった。

おそろいを一組しか用意しなかった場合、妹の私が大きくなって、姉のコートを着る頃には、姉には違うコートを買ってやらなければならぬ。そうすると、「おそろい」は成立しなくなる。小さくなった姉のコートを妹に回す、という経済的にも納得がゆく年中行事と、かつ麗しい「姉妹のおそろい」が、両方成立し続ける、というコースを遵守するには、同じデザインのコートが手に入るときに、全てのサイズを手に入れておくしかなかった、というのである。かなりの出費だったが、将来を見越しての賢い投資のようなものだから、実家に金を出して何とか全て手に入れた、と得々としていう。イマジネーションがあるのかないのかわからない。④ありすぎるのとなさすぎるのの両方だろう。

小学校に入る頃にはもう、逃れようのない宿命の重さに、秋になるとびくびくした。馬鹿な友人は、私が同じコートをずっと着続けているのと思つたらしい。どんなに大きくなってもそのコートはついて回る。その絶望感姉も同じだったろうが、私よりは⑤シヤツカン(汗)まじりだったろうと思う。「——姉は(同じ色、同じ型)といふ、新品に袖を通したわけだから。

新品だなんて。後日姉は⑥憤慨(ふんがい)するがたない、という表情でいった。新品だからいいなんて、とてもない話だわ。考えてもごらんよ。まっさらの状態から、いろんな日々を経てようやくある程度自分になじむものになってきた、それなのにまた全く同じ品が目の前に現れて一からつきあい始めないといけないのよ。無理矢理リセットさせられるのよ。あんたはいいわよ。前回と全く同じもの、というわけではなかったでしょう。

それは確かにそうだった。わずかな「へたれ方」や「型くずれ」は毎年違うものだった。もつとも、それは私たち二人以外にはわからないものだったろうけれど。

⑦いちばん大きなコートは、ほとんど新品だった。十六になった姉は、さすがに嫌がつて、おこづかいを貯めてこっそり自分の好きな冬用ジャケットを買い、それでふた冬を過ごしたからである。私は最後にその、「ほとんど新品」に袖を通すことができた。昔からの友人知人の集まりに、そのコートを着ていくのは、さすがにうんざりするものがあったが、そうでないときには、「——」初めて出会う人や初めて行く会への出席とかには、姉ほどは嫌ではなかったと思う。

実のところ、そのコートは私に似合っていたのである。そして、姉には、気の毒なことにあまり似合っていなかった。姉はボーイッシュで、ユニセックスな服装が似合った。姉がそのコートを着ると、悪いが男性と生まれたひとの女装のように思われた。姉にもそのことはよくわかっていたと思う。同じ遺伝子をもって生まれてきたのに、神様も酷なことをするものだ。姉の着古したコートの呪縛から離れ、私は姉と違う人生を生きていることを実感していた。

姉は高校を卒業すると、南米へ旅立った。昔からインカ帝国に興味を持ち、遺跡を回るのが夢だったのだ。もう、向こうではコートなんか着る必要はないだろうな、と私は⑧最後の日、ウィンドブレーカーを着た姉を送り出しながらぼんやり思った。数か月後、そのウィンドブレーカーは、姉の他の荷物と一緒に送り返されてきた。姉は現地のバスに乗って事故に遭い、落命していた。

旅行会社の手配した飛行機で家族とともに現地に渡り、諸々の事務的な手続きが終わり、日本に帰ってきて、⑨ツヤ、葬式も済ませ、

数か月がたち、気がついたら冬が来ていた。

①冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。昔からのコートが、まとめていれてあるものだった。なんとなくぼんやりと、D(その)中から、一番小さなコートを取り出し、その上に次に大きなコートを重ねてみた。そしてその上にはまた次に大きなコートを。そうやって、順繰りに着せ込んでいくと、最後にはロシアの入れ子人形のようになり、E(人間の)ように立体的に膨らんだ。一番下の、一番小さなコートは私だ。姉はこれを見ていない。次からの数枚は、裾のところにかなたなみが出てくる。私がしよつちゅう、姉にしがみついていた跡だ。姉と、私の、二人の冬が、混濁(こん濁)して、ない交ぜになって、姉から守られているようでもあり、②ペグ(穴)まわっているような気にもなった。そうだ、思い出せば、姉はいつも、私を氣遣(きづかい)っていた。最後のコートを着たがらなかったのは、もしかしたら、いや絶対、物ごころついてからは新品を着たことがなかった私のために、それを新品のまま渡してやりたかったからではないか。そういえば、私が最後のコートに手を通したとき、「やっぱ、あんたにはそれ、似合うよ」と、満足そうにいついていたではないか。

一枚一枚に付いた、F(小さな)染みやほころび。姉と私以外、誰も知らない、私たちの人生の重なる、入れ子人形のいちばん上に、姉が漬したウィンドブレーカーを着せた。

「おねえちゃん」

小さかった頃のように、そう呼んだら、自然と口が歪み、小さなコートの私が、ウィンドブレーカーの裾をつかみ、わんわん声を上げて泣いた。

問一 傍線部①とあるが、なぜ()をつけたのか。適当なものを次から選び、記号で答えよ。

A 実際にその現場に「私」はいなかったから。

イ 作者がこの場面の重要性を強調したかったから。

ウ 作者はいつも、「らしい」には()を用いるから。

エ 幼いころの記憶なので、「私」は覚えていないから。

問二 傍線部②とあるが、母親が満足をしたのはなぜか。適当なものを次から選び、記号で答えよ。

A 「姉」がきちんと「私」の面倒を見ていたから。

イ 「私」がいたずらを怒られて泣いたことに気が晴れたから。

ウ 「姉」と「私」の区別がつかなくなったから。

エ 自分の思い描いていた姉妹の姿が見られたから。

問三 傍線部③が表す箇所を二つ抜き出し、それぞれの最初と最後の四字を答えよ。

A 「姉妹のおそろい」を長期にわたって完成させた一方で、多額の借金を背負わなければならなかったこと。

イ 「姉妹のおそろい」を長期にわたって完成させた一方で、「私」と「姉」の気持ちは一切考えなかったこと。

ウ 「私」と「姉」に「おそろい」が似合うことを見抜いた一方で、多額の借金を背負わなければならなかったこと。

エ 「私」と「姉」に「おそろい」が似合うことを見抜いた一方で、「私」と「姉」の気持ちは一切考えなかったこと。

問四 傍線部④とあるが、「姉」が最後のコートを着なかった理由について、

i 「私」が十四歳の時に考えた理由を四十字以内で答えよ。

ii 姉の死後、「私」が気づいた本当の理由を四十字以内で答えよ。

問五 傍線部⑤とは、「私」にとって、何が「最後」であったのか。十字以内で簡潔に答えよ。

問六 二重線部A～Fについて、次の問いに答えよ。

i 二重線部A「目を細める」・B「憤慨(ふんがい)するがたない」の意味について、それぞれ後から選び、記号で答えよ。

A ア うれしそくに微笑む イ 哀しそくにうつむく ウ 不思議そうに見つめる エ 意外そうに驚く

B ア おかしそくに仕方ない イ 何かよくわからない ウ 腹立たしくて仕方ない エ 何の興味もない

ii 二重線部Cを不自然にならない程度に正しく区切ったもの(文節)として適当なものを次から選び、記号で答えよ。

A 冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。イ 冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。

ウ 冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。エ 冬物を出そうとして、コートの箱に気づいた。

iii 二重線部Dの「中から」が「かかっていた」(修飾していく)部分として正しいものを記号で答えよ。

その中から、①一番小さな②コートを③取り出し、④その上に⑤次に大きなコートを⑥重ねてみた。

平成二十九年年度 樟蔭中学校 入学試験 問題用紙 (A入試)

【国語】

平成二十九年一月十四日 実施

解答は解答用紙に記入すること。

(三枚のうち その三)

iv 二重線部 E・F で用いられている表現技法を次から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア 直喩 (明喩) 法 イ 隠喩 (暗喩) 法 ウ 反復法 エ 体言止め オ 対句法

問八 「I」「II」に当てはまるのに最も適当な語を後から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア そして イ なぜなら ウ しかし エ たしかに オ つまり

問九 この文章は前半と後半の二つに分けることが出来る。二つに分け、後半部分の最初の五字を答えよ。

問十 次の i~v について、本文と合っているものには○、間違っているものには×を書き入れよ。

i 「私」は「姉」のことを、「おねえちゃん」とずっと呼んでいた。

ii 「姉」と「母」はコートがきつかけでずっと仲が悪かった。

iii 「母」は一人っ子だったため、「姉妹」にあこがれていた。

iv 「姉」は飛行機事故に遭って、南米で落命することとなった。

v 「姉」の遺書には、妹である「私」に対しての想いがつづられていた。

問十一 この文章の題名として最も適当と考えられるものを次から選び、記号で答えよ。

ア コート イ マトリョーシカ ウ 母の愛情 エ 「姉」はボーイッシュ オ インカ帝国の秘密

問十二 波線部 a~c のカタカナを漢字に直せ。

二、次の各問いに答えよ。

問一 次の①~⑤の四字熟語の□には漢数字が入る。それぞれの□の数字を足し、その合計を漢数字で答えよ。

例 □長□短 (人や物事について、いい面もあり悪い面もあること) 一三二二

① □東□文 (売値が非常に安いこと) ② □死□生 (危ういところで奇跡的に助かること)

③ □朝□夕 (わずかな期間) ④ □角□面 (ひどくまじめで堅苦しいこと)

⑤ □者□様 (やり方や考え方などが、人それぞれで違うこと)

問二 次の①~⑤のことわざの□には動物が入る。(一)の意味となるよう適当なものの選び、記号で答えよ。

① □を追うもの山を見ず (一つのことばに夢中になって、他のことに余裕がなくなること)

② □の手も借りたい (非常に忙しく手不足で、どんな手伝いでもほしいこと)

③ □の耳に念仏 (いくら意見をしても全く効き目のないこと)

④ 捕らぬ□の皮算用 (手に入るかどうかかわからないものを当てにして計画を立てること)

⑤ 張り子の□ (虚勢を張る人、見かけだけおしの人)

ア 犬 イ 猫 ウ 狐 エ 象 オ 猪 カ 馬 キ 狸 ク 虎 ケ 鹿

問三 次の①~⑤それぞれの作品の共通した作者を後から選び、記号で答えよ。

① 吾輩は猫である・坊ちゃん ② くもの糸・杜子春 ③ 手袋を買いに・こん狐

④ 注文の多い料理店・銀河鉄道の夜 ⑤ 走れメロス・人間失格

ア 夏目漱石 イ 新美南吉 ウ 樋口一葉 エ 島崎藤村 オ 石川淳

カ 芥川龍之介 キ 宮沢賢治 ク 太宰治 ケ 川端康成 コ 椋鳩十

